

P. Schwartz-Shea, 2014 “Judging Quality : Evaluative Criteria and Epistemic Communities”,
in Yanow, D. and P. Schwartz-Shea, 2014 *Interpretation and Method: Empirical Research
Methods and the Interpretive Turn*. Armonk, NY and London, M.E. Sharp. pp.120-146

P. Schwartz-Shea, 2014 「質の判断：評価規準と知識共同体」 pp. 120-146.

➤ 紹介文

本稿は、解釈的手法並びにその哲学的基礎を専門とする Dvora Yanow と、政治学を専門とする Peregrine Schwartz-Shea の編著による、*Interpretation and Method: Empirical Research Methods and the Interpretive Turn* 第2版の冒頭に収められた論文である(初版：2006年)。7章にあたる当該論文は、解釈的研究の評価基準に関するこれまでの研究レビューを行った上で、解釈的研究を評価する際の七つの基準を新たに提示している。

➤ 導入・概要

- 政治学や社会学等の研究分野において解釈的な知識共同体を拡大しようとする際、解釈的研究の質を判断する基準が存在しないという課題に直面する。
- 本稿の目的は、解釈的研究という知識共同体が有する一連の世界観(認識論的・存在論的前提、理論的コミットメント、研究目標、評価基準、方法論等)の特徴を検討し、解釈的研究の七つの評価基準を提示する。

➤ 解釈的研究の世界観 (120 - 124 頁)

- 解釈的研究には共通の基準(criteria)が共有されているわけではなく、その世界観の構成要素を特定するのは難しい。このような注意点を踏まえつつ、解釈的研究の世界観の特徴を簡潔に説明したい。
 - 第一に、解釈的手法の中心的な目標は、人間による意味づけを理解することにある。ここで因果関係の問題は必ずしも除外されるわけではないが、量的研究(variables)の世界観における法則性の理解とは大きく異なる。
 - 第二に、解釈的研究者はデータの「形式(form)」と多様性を尊重する。データとは、インタビュー、ドキュメント、フィールドノートなどから得られる文章データや、イメージやサウンド (Bauer & Gaskell 2002; Danjoux 2014)、建築空間やオブジェクト (Harper 2003; Yanow 2014) が対象となる。

➤ **基準文献(Criteria Literature)の歴史(124 - 125 頁)**

- 1970 年代後半から 1980 年代前半にかけて、それまで解釈・質的研究の実施において暗黙に存在していた基準が、実証的研究の世界観における基準とは異なるものとして、明確に展開され始めた。
- 以下の二つのテキストは、解釈・質的研究の実施基準を示した古典的文献である (Creswell 1998b)。
 - ◇ Miles & Huberman(1984) “Qualitative Data Analysis: A Sourcebook of New Methods”
 - ◇ Lincoln & Guba(1985) “Naturalistic Inquiry”

➤ **基準(criteria)：進行中の議論(125 - 130 頁)**

- 1990 年代に入ると、実証主義的世界観に基づく基準を解釈的研究へと援用しようとする試みに対し、上記した二つの古典的文献の貢献を踏まえ、解釈的研究の新しい基準(criteria)の開発が盛んに行われた。
- 下記は、解釈的研究の実施及びその評価に関して開発された、包括的な原則(基準)の多様性を示す年表である。年表からも分かる様に、各研究者によって示された解釈的研究の基準は一様ではない。
 - ◇ 例えば、古典的文献でもある Lincoln & Guba (1985) は実証主義的研究の基準を参照としながら、客観性(Confirmability)、信頼性(Dependability)、内的妥当性(Credibility)、外的妥当性(Transferability)を指摘する。また Riessman(1993)は、Lincoln & Guba (1985)の提示する基準と類似した、説得力(Persuasiveness)や一貫性(Coherence)という基準を示している。それ以降に開発された基準では、Lincoln(1995) の特権の共有(sharing of privileges)や発言権(voice)、Brower, Abolafia & Carr(2000)の批判性(criticality)に見られるように、社会における不平等への挑戦において、当該研究が利用可能かという点が含まれている。
- このように、「解釈的研究を評価するための適切な基準は何か」、「質の高い解釈的研究を行うためのガイドラインは何か」という問いに対して提出された「基準(criterion)」は、各論者が用い語彙の多様性が示すように、ほとんどコンセンサスが得られていない状況にある。

Interpretive Approaches to Evaluative Criteria: Selected Later Texts¹

Year	Study						
	Lincoln and Guba	Eisner	Maxwell	Lather	Riessman	Lincoln ³	Brower, Abolafia, and Carr
Criteria ²	Credibility	Structural collaboration	Descriptive validity	Ironic validity	Persuasiveness	Epistemic community standards	Authenticity
	Transferability	Consensual validation	Interpretive validity	Paralogic validity	Correspondence	Positionality	Plausibility
	Dependability	Referential adequacy	Theoretical validity	Rhizomatic validity	Coherence	Community purpose	Criticality
	Confirmability		External validity/ generalizability	Situated/ embedded validity	Pragmatic use	Voice	
			Evaluative validity			Critical subjectivity	
						Reciprocity Sacredness Sharing of privileges	
Number of terms	4	3	5	4	4	8	3

¹Lincoln and Guba (1985) is one of two classic texts that serve as a baseline for comparison with later interpretive criteria writings. The six other texts presented here were selected based on the prominence of the author(s) as judged by extensive citations of their work in the criteria literature, as well as to illustrate the evolution of this literature over time.

²Terms are listed in the order discussed by the authors.

³Terms represent my words summarizing full-sentence explication.

➤ 暫定的な基準の設定に向けて(130 - 140 頁)

- 先述した基準や技法に関するコンセンサスの不一致において、どの用語が最も頻繁に使われているかについては検討することができる。ある特定の用語（「基準 criterion」であれ「技術 technique」であれ）が用いられる際に、なぜこれらの用語が用いられているのだろうか。また重要な点は、それらの用語は解釈の実践をどのように反映し、さらに解釈の実践に関する考えをいかに構築しているのか。これらの問に対する答えを得るために、上記した図表に代表されるテキストと、他の 25 冊の社会科学方法論の教科書における基準に関する言及を分析した。以下では分析から得られた七つの用語を、現時点での解釈的研究の評価に有用な暫定的な基準のセットとして提示したい。

● 一次用語(First-order terms)

以下では、一次用語(first-order terms)、すなわち解釈的研究の評価基準全体を包括する用語として四つの概念を示す。

(1) 信頼性 (Trustworthiness)

- 「信頼性」とは、Lincoln & Guba (1985) によって導入された概念である。研究者が自身の研究プロセスを通じて、自覚的に慎重であり、透明性があり、倫理的

であることを意味する。敷衍すると、研究者自身が研究結果の再検討の可能性を認めているということの意味する。

(2) 厚い記述(Thick Description)

- ・ 「厚い記述」とは Clifford Geertz (1973a) がエスノグラフィーを記述するために Gilbert Ryle から借用した概念である。この概念は、解釈的研究であることを認識し判断するための基準としての性格を持つようになった。
- ・ この概念は、文脈固有の意味のニュアンスを捉えるための、出来事、人物、相互作用に関する十分な記述(研究者の解釈が「厚い記述」によって提示される証拠データ(evidentiary data)によって支持されうる程度の)が、研究の中に存在することを意味する。

(3) 再帰性(Reflexivity)

- ・ 再帰性という用語は多様なルーツを有しているが、Lincoln & Guba の解釈的研究の基準に関する文献において「再帰的日記」をつけるという手法として登場した。これは、「調査者が日常的に、あるいは必要に応じて、自己と方法に関するさまざまな情報を記録する一種の日記」(1985 : 327) と定義される。
- ・ この評価概念は、単に日記を書くということに留まらず、研究者としての姿勢、すなわち、研究プロセスのあらゆる局面において、自己の役割を強く意識し、理論化することを含意している。再帰性は、現場で研究者自身が他者の反応を引き起こす可能性から、研究者が現場において特定の職業やその他の階層と交渉するという、研究者自身の見解の偏りおよび「位置性」までをカバーしている。

(4) トライアングレーション(Triangulation/Intertextuality)

- ・ トライアングレーションとは、最も広義には、少なくとも三つの異なる分析手法を用いて現象を理解しようとすることを意味する。この手法は、分析の多元性を意味していることから、解釈的世界観の評価基準として広く受け入れられる一因となった。すなわち、分析の多元性は、データのさまざまな形式を尊重することと、分野を超えた協働から生まれる可能性の複雑さや豊かさという解釈的な感性に呼応している。
- ・ トライアングレーションは、複数の方法、研究者、学術パラダイムによって知見の裏付を行うだけでなく、その手法における多元性が一貫しないまたは矛

盾した知見を発見することがある。こうした矛盾や相反する知見を軽視するのではなく、それに対処することが研究者に求められる。

- ・ ただし、この手法においては量的研究の世界観、すなわち単一の情報源、研究者、理論によって提示された知見は信頼できないという、解釈的世界観とは正反対の感性が含まれていることに注意が必要である。

- 二次用語(Second-order terms)

先述した四つの一次用語と比較すると、下記の二次用語・概念は、信頼できる研究を達成するための「ハウツー」に関する「技法」に関するものである。

(1) 情報提供者のフィードバック／メンバー・チェック (Informant Feedback/Member Checks)

- ・ 「情報提供者のフィードバック」及び「メンバー・チェック」は、人類学と社会学に由来する用語である。両概念は、研究者が「正しく理解できたか」、つまり、研究対象者の経験を彼ら自身の言葉で理解できたかどうかを評価するために、研究対象者からフィードバックを求めることによって、研究者が自身の意味づけを検証(test)する方法である。

(2) 監査／透明性 (Audit/Transparency)

- ・ 「監査」は、研究手順を文書化する一連の実践を指し、研究者が「この研究を具体的にどのように行ったのか」という問いに答えることを意味する。
- ・ ここでは、研究を実施する際に使用したプロセスや研究者の決定について可能な限り完全な記録を作成することが求められる。例えば、計画したインタビューの実施や、どの地点・地域を訪れたか、どの文書を調査したかなどが記録に含まれる。こうした記録作成の最終的な目標は、研究者の決定、作成されたエビデンス、導き出された推論を関係づけるとともに、それらのプロセスをできる限り他者に曝け出すという意味で透明化(transparent)することである。

(3) ネガティブケース分析 (Negative Case Analysis)

- ・ 「ネガティブケース分析」とは、研究者が特定のパターンや答え、解釈にすぐに落ち着いてしまうのを防ぐ技法を意味する。すなわち、研究者の最初の印象や前提、自身が構築した説明の再検討を迫るような証拠、つまり「ネガティブ」

な事例を探求することを意味する。

- ◇ Miles & Huberman(1994)は、「外れ値の意味を確認する」、「極端なケースを使う」、「驚きを追いかける」などのフレーズを使ってこのアイデアに言及している
- ◇ Lincoln & Guba (1985) は、「ピアブリーフィング(Peer debriefing)」という呼称において、自らの分析を同僚に批評してもらうことを推奨している。
- ◇ Brower(2000)も、「批判性」の基準を満たすために「競合する見解や声を認識し検討する」という同様の技法を挙げている。(2000, 391)。

➤ **量的研究の世界観との差異：因果と一般化可能性に着目して(140 - 142 頁)**

- 因果(Causality)と一般化可能性(generalizability)は量的研究の世界観の構成要素であり、解釈的な観点からその意味について以下で一言述べたい。
- まず、量的研究の因果が人間の行動に関する一般的かつ予測可能な法則の探求と関係することに対し、解釈的研究では因果について以下の理解が存在する。
 - ◇ すなわち、一般的な法則としてではなく具体的な事例において因果を理解するという観点である。例えばある政策がどのように実施されたかについて、かなり具体的な因果関係を語ることは解釈的研究の条件と矛盾するものではない。文脈の中で手がかりを注意深くマッピングし、出来事間の関係を追跡する解釈的手法は、このような因果関係の実証に適している。
- 一方で、量的研究が特定の知見を別の対象に当てはめた際にも同様の知見を得られることを一般化可能性と表現し、それを研究の基準としたことに対し、解釈的研究では、ある研究から得た知見（解釈的研究では「理解」あるいは「洞察」とも呼ぶ）を他の環境に移すことがいかに妥当であるかを他の人が評価できるように、「厚い記述」を提供する必要があると考える(Lincoln & Guba 1985)。

➤ **結論：知識共同体と判断(142 頁)**

- 単一の評価基準を開発することは解釈的方法論の特徴や世界観と矛盾する。しかし他方では、知識共同体の中であれ外部であれ、解釈的研究の正当性に関する判断から逃れることはできない。本稿では、解釈的研究の実践と目的との関連性から、帰納的に開発された一連の基準を提示した。

- これらの基準は、解釈的世界観の内部で活動する人々に、研究の質に関する議論の出発点を提供するものである。本稿はこれまでの検討を通して、知識論的共同体のメンバーに対して、研究の質に関する判断の根拠を示した。